

# 大学院重点化 構想の足元

総合科学部  
情報行動基礎研究講座



上 領 達 之

「十年に一度の学生」という表現が、K君にはよく似合う。たった一人で新しい任地での研究をどう始めたものかと手を束ねていた十三年前、神様から遣わされたかの如くに現れたA君以来のことだから、文字の上でも偽りはない。K君は山陰の産である。三年次の講義や実習の印象では、勉強していたという様子も見せぬ、目立たない学生であった。成りゆきから私の研究室で卒業論文を書き、大学院の修士課程へ進んだ。

変身が始まったのはそれからである。私の年来の夢であったテーマを自らの課題に選び、開拓者に不可避なさまざまな困難を乗り越えて、期待をはるかに上回るペースで研究を進めていった。平日は深更に及ぶまで実験し、休日も必ず何時間かは研究室で過ごして、そのうえよく勉強した結果である。「十年に一度の」という所以をご理解いただけよう。

## 西条での生活

正月に帰郷する修士一年次の学生には、例年、休み中に進路を考えておくよう指示している。博士課程への進学以外の希望を予測せず型どおりに指示を与えたK君から、即答が返った。「就職させて下さい」。何故だ？ 初めは言を左右にしたK君の答は「あと四年間は続くこの生活に、学位が値するとは思えません」。西条を生活の場としておられない方にはお判り頂けないかもしれないが、私には理解できる。否、その気持ちの一端を推察できる、とでもいうべきか。私自身は研究室の近くに所帯をもち、食事の心配はなく、雨がひどければ家人に車での送り迎えを頼めるのだから。

起伏のみ多く、利用できる商店は僅かなこの西条での、車のない生活。

バスが通うプール・ボール沿いに住む学生は少ない。通学路の多くは、道幅せまく街灯も貧しい。みぞれでも降ればその夜道を片手に傘、片手に自転車のハンドルを握って、滑らぬように上りかつ下らねばならぬ。日中ひと気の無い下宿は、戻ってきた彼らの身体さえなかなか暖めてくれないだろう。西条の冬は殊の外寒い。盆や正月も実験を続ける学生には、カップ麺だけで過ごせというのか？ 精神主義を説く時代は過ぎた。K君に「学問に対する情熱」を云々する言葉を、私はもたない。

## 重点化構想

本学では今、自然科学系研究科の再編成による大学院の重点化が構想されている。全国に数ある大衆化してしまつた大学院の中から、次の世代の真の研究者を育成すべく選ばれて、重点的に国費の配分を受けることが、重点化の意味であろう。重点化を構想するとは「博士課程の学生を立派に育てられます」と宣言することに他あるまい。

K君が向学心に欠けるとは、断じて思わない。私たち（の作つた状況）がその意欲を殺ぎとつたことを悟らねばならぬ。この状況を放置したまままでの重点化構想は、砂上に高樓を

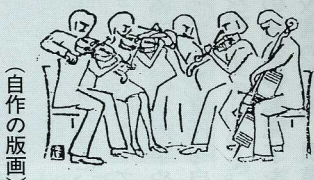
築こうとするほど虚しい業ではないのか？ まだ学生が居ることに安住して現今の学生気質から目を背け、これから発足する下見地区学生街整備委員会の答申が出るまで座視すれば、博士課程の学生は何れ居なくなるであろう。そのような大学院の重点化など論ずるまでもない。

## 地方拠点大学

西条の地で重点化を構想するならば、前例は無くとも、大学院学生のための寄宿舎の整備をも同時に構想せねばなるまい。ルビコンを渡つたのは私達自身なのだ。重点化を意味あるものとするために、私たちが全員で学長を、東広島市長を動かさし、また自らも奔走して大学院寄宿舎をもつ地方拠点大学の先例を開くべきではないのか？

## プロフィール

- （かみりよう・たつゆき）
- ◆昭和十七年 東京都生まれ
- ◆農学博士
- ◆専門は分子細胞生物学



（自作の版画）